



10.12 緊急追悼集会

アンナ・ポリトコフスカヤの暗殺とロシア・チェチェン戦争



日時:2006年10月12日(木) 19:00~21:00

場所:文京区民センター 2A会議室

共催: チェチェン連絡会議 市民平和基金 チェチェンニュース編集室 チェチェンの子どもを支援する会 ハッサン・バイエフを呼ぶ会 社団法人アムネ스티ー・インターナショナル日本 日本ビジュアル・ジャーナリスト協会 財団法人日本国際フォーラム

後援: DAYS JAPAN 週刊金曜日

10月7日、チェチェン戦争を追っていたジャーナリストのアンナ・ポリトコフスカヤ女史が、モスクワで何者かに暗殺されました。

彼女は1999年以来、毎月のようにチェチェンに通い、軍事侵攻によって虐げられた人々についての地道な報道をかさねており、その報道は、プーチン政権への厳しい批判となっていました。日本でも「チェチェン やめられない戦争」などの訳書によって知られている彼女を悼む声は、強くなるばかりです。

ジャーナリズムや平和、人権の運動でチェチェンに関わってきた私たちは、彼女の突然の死を悼み、この暗殺に抗議するための緊急追悼集会を企画しました。同じ試みが、世界各地で同時発生的に生まれています。この事件によって、世界中の平和を求める人々と、社会の問題を告発しようとするジャーナリズムは、大きな挑戦を受けているのではないのでしょうか。

集会では、長年チェチェンを現地取材し、ポリトコフスカヤ女史にも取材している林克明さんと、ソビエト連邦崩壊後のジャーナリズムに対する弾圧をウォッチしてきた稲垣収さんの報告を伺います。また、当日は女史への追悼文を発表するとともに、遺族にあてたお見舞金を受け付けます。会場では、ポリトコフスカヤ女史の著作の販売もします。

●報告者／司会者プロフィール

林克明 (ノンフィクションライター) : ノンフィクションライター。1960年長野生まれ。95年から1年10ヶ月モスクワに住み、チェチェン戦争を取材。2001年、＜バビツキー事件＞(ロシアのジャーナリストA・バビツキー氏がロシア政府に弾圧された事件)などに取材した「ジャーナリストの誕生」で第9回週刊金曜日ポルタージュ大賞受賞。著書に『カフカスの小さな国 チェチェン独立運動始末』(第3回小学館ノンフィクション大賞優秀賞)。近刊に写真集『チェチェン 屈せざる人びと』(岩波書店)、共著に『チェチェンで何が起きているのか』

稲垣収(フリージャーナリスト・翻訳家) : フリージャーナリスト・翻訳家。1962年東京生まれ。91年のソ連崩壊前後からロシア、ウクライナ、バルト三国を取材。ビデオジャーナリストとしてグルジア、モルドヴァ内戦などのドキュメンタリーも制作。ガイダル・元ロシア首相代行へのインタビューなども。またユーゴ、イスラエルなど、紛争地でも取材してきた。翻訳書に「アウト・オブ・USSR—“天国”からの脱出」(J・サンダレスク著/小学館)などがある。

青山正(司会) : 市民平和基金、ピースネットニュース代表。1988年以来、市民運動のネットワーク紙「ピースネットニュース」を発行している。1995年に日本山妙法寺の寺沢潤世上人の知らせによりチェチェン問題を知り、同基金を立ち上げた。現在チェチェン連絡会議代表。

目 次

アンナ・ポリトコフスカヤとは誰か？	3
インタビュー：アンナ・ポリトコフスカヤへのインタビュー	4
ハッサン・バイエフからの追悼メッセージ	6
アンナ・ポリトコフスカヤの死に寄せて	6
プーチン以後のロシア 暗殺年表	7
プーチン大統領就任後のロシアでは毎年二人の記者が暗殺されている	8
記事：『放たれた毒』	10
何がポリトコフスカヤを殺したか？	12
チェチェン年表	15
アンナ・ポリトコフスカヤ暗殺事件に対する日本市民の声明	16

主催団体：チェチェン連絡会議とは

「チェチェン連絡会議」は、チェチェン戦争の平和的解決のために活動している NGO と個人が集まり、この問題への関心を日本の社会で喚起するために、2005年6月に結成されました。この戦争を少しでも早く終わらせるために、日本の国内でロシア軍の侵攻に反対する声を高め、各国の支援組織との連携を深め、国際世論としてのチェチェン戦争反対、ロシア軍の撤退を強く要求していきたいと考えています。ぜひ皆様のご協力と、参加をお願いします。

●問い合わせ先：

146-0082 東京都大田区池上 6-30-17 TEL/FAX：050-3329-3951

メール：clc@chechennews.org

ウェブサイト：<http://chechennews.org/>

郵便振替口座：00180-6-261048 口座名称：チェチェン連絡会議

●アンナ・ポリトコフスカヤとは誰か？

アンナ・ポリトコフスカヤ情報

チェチェン総合情報 <http://chechennews.org/anna/>

プロフィール：

ロシア人ジャーナリスト。1980年、国立モスクワ大学ジャーナリズム学科卒業。モスクワの新聞のノーヴァヤ・ガゼータ評論員。1999年夏以来、チェチェンに通い、戦地に暮らす市民の声を伝えた。その活動に対して、ロシア連邦ジャーナリスト同盟から「ロシア黄金のペン賞(2000)」、アムネスティ・インターナショナル英国支部から「世界人権報道賞(2001)」、および池澤夏樹氏が選考委員を務める国際ルポルタージュ文学賞「ユリシーズ賞」を受けた。2002年、モスクワ劇場占拠事件では、武装グループから仲介役を指名され、交渉にあたった。2004年の北オセチア・ベスラン学校占拠人質事件では、チェチェン独立派のスポークスマン、アフメド・ザカーエフらと連絡をとりつつ、空路北オセチアに向かうが、KGB要員たちの乗り合わせた機内で毒を盛られ、一時重態に。復帰後もチェチェン報道を続けるが、2006年10月7日、モスクワで何者かに暗殺された。享年48歳。



著作：

『チェチェン やめられない戦争』

誰も立ち入ることのできないチェチェンに、一人の女性ジャーナリストが分け入る。初めは新聞社の取材記者として、そして、いつしか告発者として、チェチェンの人々の声を、世界に伝え始めた。第二次チェチェン戦争報道の第一人者、ポリトコフスカヤ女史による圧巻のルポルタージュ

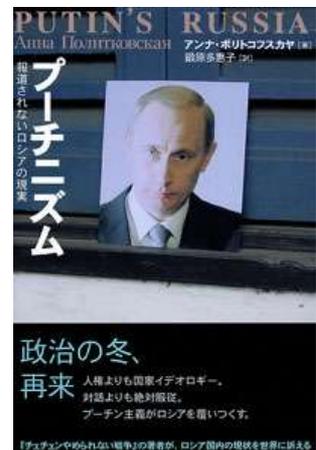
- 著／アンナ・ポリトコフスカヤ 訳／三浦みどり
- 発行／NHK 出版
- 価格／2,400+税



『プーチニズム 報道されないロシアの現実』

「政治の冬、再来——」人権よりも国家イデオロギー、対話よりも絶対服従。プーチン主義がロシアを覆いつくす。『チェチェンやめられない戦争』の著者が、ロシア国内の現状を世界に訴える。日本で2冊目のアンナ・ポリトコフスカヤの著書。ロシアの軍隊では中隊単位で兵士が脱走し、劇場占拠事件の被害者たちは、なぜモスクワ市を相手取って訴訟を起こしたのか、プーチン再選の裏では何が起きていたのか。通常の報道では決して聞こえてこないロシアの現実を、一市民の視線で報告する一冊。

- 著／アンナ・ポリトコフスカヤ 訳／鍛原多恵子
- 発行／NHK 出版
- 価格／2,205（税込み）



●「アンナ・ポリトコフスカヤへのインタビュー」

ノーヴァヤ・ガゼータ記者 アンナ・ポリトコフスカヤ

林克明によるインタビュー記事

チェチェン未来日記 <http://www.actiblog.com/hayashi/>

2004年9月に起きたベスラン学校人質事件(死者330人)の際、アンナ・ポリトコフスカヤは犯人グループと交渉するために現地に向かおうとしたところ、飛行機内で毒を盛られ、一時重態に陥った。その直後に月刊現代に掲載された原稿のオリジナル原稿(一部)。

●子どもたちを救わなくては・・

北オセチアの学校で武装集団が人質をとって立てこもった9月1日。あの日は朝から忙殺されました。とにかく現場に行ってテロリストたちと接触し、何とか子どもたちを救わねば、という思いでいっぱいでした。一刻の猶予もありません。モスクワの空港に到着すると、事件現場に一番近い空港に向かう便は運休、近隣の町への便もつぎつぎに取り消されてしまった。私は3回搭乗手続きをとってもまだ出発できなかったのです。早くも怪しい雲行きでした。

●3人の秘密警察

そんな中、空港職員がやって来て「飛ぶチャンスはある。自分が乗せてやろう」と言うので、私は彼について行ったのです。その飛行機にはほとんど乗客は乗っていませんでした。機内にFSB(連邦保安局=KGBの後身機関)の職員が3名乗っているのに気づきました。彼らは、搭乗の証拠を残さないため乗客名簿にも記載されませんが、一目瞭然でした。しかし私は、何があってもベスランへ向かうのだと心に決めていました。

●一杯のお茶が・・

その日の朝、息子と一緒に食事をしただけで、空港では一口も物を口にしませんでした。夜10時ごろのことです。スチュワーデスに紅茶を頼んで飲んだところ、10分もしないうちに、失神しました。気付いたときには、私はどこかの病院のベッドに寝ていました。点滴や注射をつづけて翌朝には意識を取り戻すことができました。

●モスクワ劇場人質事件

私には、ベスランの学校で子供たちを人質にとった犯人と交渉できる可能性がありました。私は一昨年10月のモスクワ劇場占拠事件のときに、チェチェン人の犯人側から交渉役として指名され、実

際に交渉した経験があるからです。あのとき劇場を占拠したグループは、ロシア軍によるチェチェン攻撃の即時停止と、ロシア軍のチェチェンからの撤退を人質解放の条件にしていました。しかしもちろん、プーチン政権はこれらの要求を呑みません。そこで私は、妥協案を提示したのです。つまり、全面撤退ではなく、チェチェンのどの行政区域でもいいから、ロシア軍が撤退を始める。その動きを第三者が確認した時点で人質を解放するというものでした。この妥協案を犯人たちは受け入れました。私はこれで多くの人命は救われると安堵のため息を洩らしました。しかしそれつかの間、私の提示した妥協案は事件対策本部に無視され、ロシア特殊部隊の突入で、死者170人を出す大惨事となったのです。

●数百年の侵略の歴史

今回の事件の根源にチェチェン問題があることは、間違いありません。ロシア帝国は18世紀末から、チェチェンのあるカフカス地方への攻略を強め、植民地化政策を進めました。1861年にロシアはチェチェンを併合し、長年の戦争の終結を宣言しました。このときまでの戦争で、チェチェン人の4分の3が死に絶えました。1917年にロシアに革命が起きてソビエト共産党政権が樹立されても、チェチェンにとっては、新たな弾圧の時代の到来にすぎませんでした。1928年から37年までの10年間の弾圧で、計20万5000人余りが虐殺されました。さらに1944年にはスターリンの命令で、チェチェン人及び近隣のイングーシ人計約40万人が強制移住させられ、その中で18万人もの命が奪われたのです。1991年にソ連邦が崩壊する直前、チェチェンは独立を宣言しました。これに対し、94年12月にロシア軍がチェチェンに侵攻。停戦をはさ

んで99年秋にプーチンが首相に就任するや、「対テロ戦争」とロシア側が呼ぶチェチェンへの掃討作戦を始めたわけです。私はこの間、チェチェンにほとんど毎月のように足を運び、さまざまな住民取材してきました。しかしモスクワに帰ってチェチェンの惨状について記事を書いたり、友人たちに話しても、私の見聞は信じてもらえませんでした。なぜなら、プーチン政権の厳重な監視下の中で、あえてチェチェンに行くロシア人記者は私しかおらず、したがって私しか見ていないからです。

●21世紀とは思えないロシア軍の蛮行

ロシア軍はたとえば、86歳の夫と62歳の妻、息子の嫁、孫たちがつましく暮らしているチェチェン人の家に深夜突入し、老夫から金銭を奪った挙げ句、ナイフで刺し殺しました。次に「おばあちゃん、お話ししよう」と言って老婦を寝室に連れて行き、5.45mm銃の弾丸を5発、彼女に打ち込んだのです。

あるいはスタールイ・アタギーという村の「掃討作戦」では、いつもの習慣通り兵士が村人から金品を奪い取りました。そのときたまたま陣痛が始まったリーザという女性は、病院入口の壁の前に両手を上げ、両脚を開いた格好で立たされました。彼女はその状態でお産を強要され、死産になりました。ウルスマルタンという町のラーゲリに連行された若い女性がいました。彼女は糞尿の入ったバケツを犬のようにくわえさせられ、四つんばいで何度も階段を上り下りさせられました。ロジータという老女は、ある日突然逮捕されて深さ1.2mの穴牢に押し込められました。上部には丸太が置かれているので身体を伸ばせず、12日間も正座したままの生活を余儀なくされました。ロジータが監禁されたのは、フィルター・ラーゲリ（選別収容所）と呼ばれる拷問所です。かつてはどこにでも大規模な収容所を建てていましたが、いまでは農場や野原に簡便な収容施設を設置するか、穴牢を掘ってそこにチェチェン人を収容します。私はこうした施設を冬場に見たことがあります。気温は氷点下だということに悪臭が立ちこめていました。「囚人」用のトイレがないからです。彼らは連日立たされ、それに耐えられなければ糞尿の上に座るしかありません。フィルター・ラーゲリは、「掃討作戦」が終われば、ただの野原に戻ってしまいます。このため、拷問の証拠は残らず、住民

は違法な拘束について告訴することもできません。前述のロジータの場合、3度も尋問に引き出され、その度にFSB（連邦保安局）の捜査官に電気拷問を受けました。「へたな踊りだな、もう少し電流を強くしようか」と嘲笑を受けたそうです。

●息子の写真を見せられて尋問

このようなチェチェン住民の証言を私が書いたり発言するのは、確証があつてのことです。なぜなら、2001年2月、第四五空挺連隊に逮捕され連行された経験があるからです。私の一番の弱みを巧みについてくる。彼らは、私の子どもの写真をみながら、この子たちにどんなことが起こり得るかを語ることも忘れませんでした。尋問の最も汚らしい部分はお話できません。口にするのもおぞましい。しかし、そうした細かなことこそ、それまで様々な人から聞き取りした第四五空挺連隊で行なわれている拷問や暴挙は、ウソではなかったという重要な証拠です。ロシア軍がチェチェンでこのような蛮行の限りを尽くしても、罰せられることはまずありません。

●ロシア全土で繰り広げられるチェチェン人弾圧

このようなチェチェン人の惨状に対し、国連を始めとする国際社会は、あまりに無力です。2001年5月に、国際人権団体ヒューマンライツ・ウォッチが、アナン国連事務総長の訪口に合わせて、チェチェン市民数百人の死体が遺棄されていた場所を発表しました。このときクレムリンは、まるで椅子に置かれた画鋸にうっかり座って飛び上がるような慌てぶりでした。大量の遺棄死体はロシア軍の仕業でないと、否定に大わらわでした。そんな中、訪口したアナン事務総長は、この件に関して一切沈黙を通しました。アナン氏は、自分の国連事務総長職の再選をロシアが後押しする限り、北コーカサスの戦争（チェチェン戦争）を祝福しつつける気なのでしょう。

いまやロシアにとって、チェチェン問題の一刻も早い解決が不可欠です。この問題が解決できなければ、今後ともロシアの全国民に危険が及ぶのは必至です。チェチェン問題は、暴力的弾圧ではなく、政治的交渉によってのみ解決します。もしプーチン大統領が継続して強硬姿勢を貫くなら、テロの連鎖が起こります。そしてその先にあるのは、大統領自らの権力喪失に他ならないということをお覚すべきです。

●ハッサン・バイエフからの追悼メッセージ

チェチェン人外科医、『誓い』著者 ハッサン・バイエフ
訳：稲垣収

11月に日本に来日するハッサン・バイエフ氏による追悼メッセージ。バイエフ氏は、1994年ロシア-アーチェチェン戦争の勃発とともに、野戦外科医として活躍。敵味方を区別しない医療活動のために、ロシア連邦軍とチェチェン過激派双方から命を狙われる。2000年米国へ亡命、同年11月米国NGO ヒューマンライツ・ウォッチから「2000年人権監視者」の榮譽を受ける。著書に「誓い チェチェンの戦火を生きたひとりの医師の物語」（2004年アスペクト刊）がある。

私がアンナ・ポリトコフスカヤの悲しい死について知ったのは、NTVチャンネルでロシアのニュースを見ているときでした。アンナとは数年前から知り合いました。最初はチェチェンで出会い、その後、彼女が(私が亡命した)アメリカにやってくるまで、私たちは、いくつかの大学と一緒に講演して回りました。アンナは素晴らしいジャーナリストで、「人々には真実を知る権利がある」という信念を持っていました。彼女の死は、われわれすべてにとって大いなる損失です。彼女はチェチェンの人々のために、疲れを知らぬ看護師として戦ってくれました。勇敢なレポーターで、正義と自由のために何度も命をかけてきました。私の国で本当に起こっていることを書いてくれた、数少ないジャーナリストの一人です。彼女の死は、チェチェン共和国と世界中にいるチェチェン人にとっても大いなる損失です。

ご存知の通り、アンナは何度も命の危険をおかして来ました。記者としての仕事をしているだけに、ロシアの警察に逮捕されたこともあります。「なんで、そんなに危険を冒すんだい？」と私が尋ねると、「真実というものには国境も、境

界線もないの。それは“世界中の誰もが入れる場所”でなくてはならないのよ。真実こそが、この世で唯一、ほんとうのものなのだから」と答えました。彼女はまさにジャーナリストとしての職務を全うしていました。声なき人々の声を伝える者として。アンナの興味は毎日の取材だけにとどまりませんでした。ロシアとチェチェンの問題に関する本も何冊か書きました。アンナはまた、多くのチェチェン人たち、とくに家族が行方不明になっている人たちを助けてきました。

この偉大なジャーナリストの早すぎる死は、まさに悲劇的なできごとです。彼女はチェチェン人の友であり、自らの仕事と、真実を伝えたいという情熱を通じてヒューマニズムを体現した真実の人間でした。アンナがいなくなってしまったことの悲しみを、多くの人が感じることでしょう。私はいつも彼女のことを、ロシアで非常に稀な、独立不羈のジャーナリストだと思っていました。

敬意をこめて
医師ハッサン・バイエフ

●アンナ・ポリトコフスカヤの死に寄せて

三浦みどり（翻訳家）

アンナ・ポリトコフスカヤの最初の本「チェチェンやめられない戦争」を訳すことになったのは私が非常に共感し、信頼しているベラルーシの作家、スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ（邦訳「チェルノブイリの祈り」「死に魅入られた人びと」など）が「今信頼できる書き手はアンナ・ポリ

トコフスカヤだ」、と2000年の来日のときに教えてくれて、その後あの本を送ってくれたからです。アレクシエーヴィチはソ連のアフガン侵攻が続いていた頃、アフガニスタンに正義の戦争をしに行ったと思いこんで乗り込んだソ連軍の若者たちが幻滅を味わい、騙された思いをしたこ

と、そこで心身を深く傷つけられ、国に帰っても、アフガニスタンで見た真実を決して口外できない状況に置かれたことを本にして、傷ついた若者たちの母親たちからは「あなたの真実なんか知らない、息子を英雄のままにしておいて」と憎まれ、裁判にまで掛けられました。

その彼女の推薦だったので アンナの本を読みたいと思ったのです。アレクシエーヴィチは アンナを高く買っていて、ユリシーズ賞の審査員であったときには池澤夏樹氏や他の審査員に対してアンナを推薦したのです。アレクシエーヴィチは境遇も違うし年齢も育った環境も違いますし、アンナととくに仲が良かったわけではないようです。「アーニャはあまりにいろいろな人に容赦なく手厳しい言葉を向けるのであちこちで衝突を起こしている」とも言っていました。アンナの本を訳していると その悲鳴、叫びが聞こえてくるようでしたけれど、私は直接に会ったことはありません。本について幾つか確認するためにおそるおそる電話を掛けたときもその対応はいたって無愛想で「忙しいから 手短かに頼む」という風でした。

オセチアのベスラン事件が起きたとき、現地に向かう途中で毒物中毒になりかろうじて一命をとりとめたのですが、その後1週間もたたぬうちに「兵士の母の会」の取材などで地方出張に飛び回っていて、なかなかつかまりませんでした。日本で出された2冊目の本「プーチニズム」でもよく分かるように彼女は軍隊内の腐敗についての厳しい記事も続けて書いて、軍隊内のいじめを大きく取り上げていました。そんなことも、ロシア軍、今の国防省からは疎まれていたでしょう。

ラジオリバティのリスナー参加番組にアンナがでてるとよく「命を大事に」「ねらわれないように気を付けて」というファンの声が聞かれました。アンナの記者仲間も、「アンナは妥協と言う物を知らない」と言っていたけれど、子供たちを殺すという脅しを何度も受けて怖がってもいたそ

うです。

モスクワ劇場事件で犯人たちに交渉の仲介役として指名されたとき、息子は反対したとそう。「おかあさん、殺されちゃうよ」と。それでも、アンナが人質になった人達に水などを差し入れに行き、息子は手伝ってくれました。こんな母親と暮らしていた子供たちは本当に大変だったでしょう。

はっきり物を言う人が今年、日本でも亡くなりました。元ロシア語同時通訳で、作家の米原万里さん、そして 今、ロシアではっきり物を言っていたアンナが殺されてしまいました。

2001年もこんな風でした。1月に私は親友を亡くし、6月にモスクワの親友が48歳で亡くなり、7月には ロシア文学者でソ連の反体制文学の翻訳が数多く、ソ連に長いこと行かれなかったのに ソ連の現状を鋭く見抜いていた江川卓先生が亡くなって、「戦争でも始まるのかしら」と不吉な思いに駆られていたら9.11が起き、ブッシュ大統領とプーチン大統領は「国際テロリズムとの戦い」の宣戦布告を声高らかにデュエットしました。

今年も そんな 喪失が重なって 不吉な思いに駆られます。アンナの殺害を「やはりロシアは怖い国だ」と日本の中にそれだけでなくもある潜在的な意識を単にあおることに利用しないで欲しい。

「あなたの真実など知らない」「真実を語ったからどうなるというのだ?」「何も変わりゃしないさ」という雰囲気はロシアだけでなく、日本でもある現実です。

アンナの本を訳し、彼女が世界中で広く読まれ、有名になればそれが少しは守りになるかと期待したのは甘かった・・・言葉が有りません。

2006年10月12日

●プーチン以後のロシア 暗殺年表

2006年9月15日 ラジオ・リバティ記事より抜粋、一部補足（稲垣收）

<http://rferl.org/featuresarticle/2006/09/d08564ab-85e6-4375-94ac-921638eab299.html>

今回のアンナ・ポリトコフスカヤさんの暗殺だけでなく、ソ連崩壊以来、ロシアではジャーナリストや政治家、銀行家、ビジネスマンなど、多くの人物が暗殺されている。

- 2006年9月14日 中央銀行副総裁アンドレイ・コズロフがモスクワで射殺される。コズロフはロシアの銀行のマネーロンダリングを撲滅しようとしていた。
 - 2005年10月16日 ロシアの2つの銀行の元オーナー、アレクサンドル・スレサレフが、モスクワ郊外で妻と娘とともに射殺される。
 - 2005年3月17日 国営電力公社の総裁で、ソ連崩壊後のロシアにおける国営企業民営化を指揮したアナトリー・チュバイスの間近で車が爆発、銃撃も受けるが生き延びる。(チュバイスは元エリツィンの側近でその後は、プーチンを引き立てるが、プーチン側近のKGBや軍出身のグループと対立していた)
 - 2004年7月9日 米国人で、『フォーブス』誌ロシア語版の編集長、ポール・クレブニコフが、彼のモスクワのオフィスで射殺される。クレブニコフは腐敗について詳細な記事を書き、フォーブスにはロシアの長者番付を掲載していた。
 - 2004年3月2日 シベリアのノヴォシビルスク市で民営化を担当していた副市長ヴァレリー・マリャソフが、自宅マンションの建物の中で射殺された。
- 2003年10月12日 クレムリンと関係の深いアルミニウム業界の巨物、オレグ・デリパスカと裁判で係争中だったビジネスマン、アンドレイ・アンドレーエフが銃撃され、重傷を負った。事件は未解決。
- 2003年7月3日 リベラルな国会議員で、ジャーナリスト、ユーリ・シチェコチヒンは、謎の食中毒をおこし死亡。多くの人間がこれは毒殺だったと信じているが、殺人事件としての捜査はまったく行なわれなかった。(＊彼はノーヴァヤ・ガゼータ紙でアンナ・ポリトコフスカヤの上司。政治家としては野党のヤブロコクのメンバー。第2次チェチェン戦争のきっかけとなったモスクワ連続アパート爆破事件に治安機関が関与している疑いを持って調査を進めていた。)
 - 2003年6月7日 国防企業R A T E Pの営業部長、セルゲイ・シチトコが同社のあるモスクワ郊

- 外のセルプホフで、自分の車の中で射殺死体として発見された。
- 2003年6月6日 国防企業アルマズ・アンテイ(R A T E Pの親会社)の総支配人代行イゴール・クリモフがモスクワ中心部の自宅の外で射殺された。
 - 2003年3月14日 プロメクシム銀行副頭取アンドレイ・イワーノフがモスクワで殺害された。
 - 2002年4月28日 元ロシア大統領候補で、クラスノヤルスク州知事アレクサンドル・レベジの搭乗していたヘリが墜落し、レベジは死亡。彼はモルドヴァ内戦を解決したロシア軍の英雄で、エリツィン大統領にチェチェンとの停戦交渉役に抜擢され、第1次チェチェン戦争の停戦合意をする。第2次チェチェン戦争の引き金となったアパート連続爆破事件は「治安機関が関与している疑いがある」と発言していた。
 - 2002年11月6日 プロムィシユレンノ・ストロイテルヌイ銀行責任者のレオニード・ダヴィデンコがサンクト・ペテルブルグで殺された。
 - 2002年10月18日 極東マガダン州のワレンチン・ツヴェトコフ知事がモスクワ中心部で射殺された。知事は同地方の金と石油産業にはびこる犯罪を取り締まろうとしていた。
 - 2002年7月3日 アルファヴィット・フィナンシャル・グループのパーヴェル・シチェルバコフがモスクワで殺害された。
 - 2002年5月21日 極東サハリン島の国境警備隊司令官、ヴィタリー・ガモフ少将がアパートに放火され死亡。少将が海産物密輸を取り締まろうとしていたのが、殺害の動機と見られている。
 - 2000年7月29日 アカデムヒム銀行会長のセルゲイ・ポナマレフがモスクワで殺害された。
 - 1999年12月30日 ビジネスマンのミハイル・ダフヤがサンクト・ペテルブルグ市街地で狙撃されて死亡。ダフヤはノヴゴロド州で木材ビジネスをしていた。
 - 1999年11月17日 インテルスヴァーズ銀行会長のセルゲイ・ベロフがモスクワで殺害された。

●プーチン大統領就任後のロシアでは毎年二人の記者が暗殺されている

2006年10月10日 ラジオ・リバティ記事

<http://rferl.org/featuresarticle/2006/10/135abf80-8e82-4cb9-b150-af4236f3874e.html>

NYに拠点を置く「ジャーナリストを守るための委員会」(CPJ)はポリトコフスカヤを「過去25年で最も報道の自由に貢献した記者の1人」に選んだ。

同委員会は、プーチン大統領就任後のロシアでプロの手によって殺された12人のジャーナリストについての報告をまとめている。これらの殺害事件はたった1件も解決されていない。同委員会は世界で「ジャーナリストにとって最も危険な国」の第3位にロシアを挙げている。ちなみに過去15年のトップはイラク、2位がアルジェリア。

「しかしこれらの国では戦争や大きな紛争があります。ところが、プーチンが権力の座についたからのロシアでは、戦場でなく平時にジャーナリストが暗殺されているのです」とCPJのコミュニケーション部長、アビ・ライトは語っている。

暗殺された記者たちは、政府や地方の権力者の汚職・腐敗を追及していたケースが多い。

暗殺された記者のリスト

イゴール・ドムニコフ(42) 自宅アパートの建物の入口でハンマーで殴られ、2000年7月16日モスクワの病院で死亡。隔週のノーヴァヤ・ガゼータ紙(ポリトコフスカヤの新聞)で文化・教育欄を担当。同紙の他の記者が石油産業の汚職取材して脅迫を受けていたので、同じ棟に住むその記者と間違っただけで襲われたのでは、と同僚は語っている。

セルゲイ・ノヴィコフ(36) スモレンスクの独立系ラジオ局、ヴェスナのオーナー。2000年7月26日、自宅アパートのビルの入口で射殺される。捜査当局は、プロの犯行と推定。ヴェスナは同地方行政部の汚職を非難する放送を数回していた。

イスカンダル・ハトロニ(46) 自由ヨーロッパ放送/ラジオ・リバティのモスクワ支局員でタジク語担当。2000年9月21日、アパートで何者かに斧で頭を叩き割られ、その夜、モスクワの病院で死亡。殺された時、彼はチェチェンにおけるロシア軍の人権弾圧についての記事を執筆していた。

セルゲイ・イヴァノフ(30) ラダTVのディレク

ター。2000年10月3日、ボルガ川沿岸のトリャッティ市にある自宅アパートの中庭で複数の男たちに射殺される。ラダTVは同市で最大の独立系テレビで、同地域の政治に大きな影響力を持っていた。

アダム・テプスルガイエフ(24) 2000年11月21日、チェチェン語を話す男たちに太股と股間を銃で撃たれ、出血多量で死亡。チェチェン共和国の首都グロズヌイに近いアルハン・カラ村で、隣人の家でテレビを見ていた。彼は第1次チェチェン戦争の間、外国人ジャーナリストの運転手、コーディネーターとして活動しており、その後、フリーランスとしてロイター通信社に寄稿していた。

エドアルド・マルケヴィッチ(29) スヴェルドロフスク州レフチンスキー市の地方紙、ノーヴィ・レフトの編集・発行人。2001年9月18日に死体で発見された。同市はしばしば地元の役人を批判しており、マルケヴィッチは脅迫電話を受けていた。1998年には謎の襲撃者たちが彼のアパートを強襲し、妊娠中の妻の前で彼を殴打するなどの暴行を加えていた。

ナタリヤ・スクリル(29) ポリトコフスカヤ以外の唯一の女性。ロシア南西部の都市、ロストフ・ナ・ドン市のナシャ・ヴレーミヤ紙の経済記者。冶金工場の権力闘争を取材していて、重い物によって何回も殴られ、翌日の2000年3月9日死亡。

トリャッティ市のトリャッティンスコエ・オボズレーニエ紙の2人の記者は、18ヶ月の間に続けて殺された。2002年4月29日、同紙編集長で同市議会議員でもあるヴァレリー・イワノフ(32)が、頭部に8発の銃弾を撃ち込まれて死亡。目撃者によれば、犯人は消音器付きのピストルを使用し、徒歩で現場から逃走。イワノフの友人で、後継者のアレクセイ・シドロフ(31)は2003年10月9日にアイスピックで胸を刺され死亡。どちらも自宅のすぐ外で殺された。同紙は犯罪や政府の汚職に関する調査記事で有名だった。シドロフは殺された当時、イワノフの殺人を調査していた。

ドミトリー・シュヴェツ(37) ムルマンスク市のTV局、TV 21の総ディレクター。2003年8月18

日にTV局のビルの外で射殺される。市長選など有力政治家についての報道に関連して、同局の記者たちは脅迫を受けていた。

ポール・クレブニコフ(41) ロシア版フォーブズ誌編集長。2004年7月9日、モスクワのオフィスの外で、走る車から銃撃され死亡。ロシア系アメリカ人の彼は、ロシアの新興財閥（オリガルヒ）に関する詳細な記事を掲載していた。

マゴメッドザギッド・ヴァリソフ 週刊ノーヴァヤ・ジェラの著名なジャーナリストで政治学者でもあった彼は、2005年6月28日に、ダゲスタンの首都マハチカラで殺害された。妻と運転手とともに帰宅途中の彼の車を、襲撃者たちは自動小銃で銃撃し、ヴァリソフは即死。ヴァリソフは政敵を紙面でしばしば攻撃しており、脅迫電話を受けていた。

●「放たれた毒」

ノーヴァヤ・ガゼータ記者 アンナ・ポリトコフスカヤ

2006年3月1日（水）英／ガーディアン紙

チェチェン総合情報 <http://chechennews.org/chn/0605.htm#anna>

2005年12月のはじめに、チェチェンのある地域の小学校で、頭痛や呼吸困難などの発作のために入院する子供達が急増しはじめました。ロシア政府に関係する医療機関は、「戦争によるストレスが引き起こした神経症だ」と発表しましたが、当時から「何らかの毒物のせいではないか」という声が絶えずありました。この現場に、アンナ・ポリトコフスカヤが行き、ノーバヤ・ガゼータに記事が掲載されました。以下は、ガーディアン紙に掲載された英文記事からの翻訳（一部）です。

1994年の11月以来、ロシア連邦の北コーカサス・チェチェン共和国では判断基準というものが変動し続けてきた。長年にわたってモスクワ政府はこの戦争に様々な名称を与えてきた。ときにそれは「チェチェンの秩序の構築」と呼ばれ、国際的な「反テロリスト」時代の開始以降は「反テロリスト作戦」となった。けれども、7万人から20万人と推定されるロシア軍兵士があたかも敵地にいるかのような作戦を遂行しているにもかかわらず、それが戦争と呼ばれることは決してない。民間人は軍事衝突の標的になっている。チェチェンで生活し、働いている人にとっては、連邦軍が新種の兵器の実験を行っていることは12年間周知の事実である。

昨年12月、シエルコフスク地区の学校で大規模な中毒が発生したという報告が寄せられた。新年に入る直前、政府の委員会は事件に関する公式な見解を表明した。「ご安心ください——中毒ではありませんでした。ストレスによる集団精神病です」。だが、チェチェンにいる誰がこんな説明を信じていただけるのか？

シエルコフスク地区病院の一室、壁際のベッドの上で、シーナと呼ばれる若い女性が発作に襲われている。彼女の顔は青白くなったり黄色くなった

り真っ赤になったりしている。弟がシーナの舌を伸ばすために彼女の歯をスプーンでこじ開け、母親が痙攣を押さえるために彼女を上から押さえつける。今、少女はありえない角度で体を曲げている。シーナの踵は彼女の後頭部に触れているのだ。

（事件から）3週間が経過した1月6日になっても、彼女の状態に改善は見られない。アセット・（シーナ）・マガムシャピエヴァは、被害者の大半が通っていた学校の生徒ではない。彼女は20歳の教育実習生で、教育実習を行うために学校を訪れていたのだ。年輩の看護師が注射器を持って入ってきた。発作はすでに15分も続いている。この看護師は一人で40人もの患者の世話をしており、先ほどまでは隣室のマリーナ・テレシエンコを診ていた。マリーナも似たような発作に苦しんでいる。

—注射器の中には何が入っているのですか？

「鎮痛剤と鎮静剤です」と彼女は溜息をつく。

—でも実際には効果がないのではないですか？

「この他には何もありません」と彼女は言う。

「どうやって治療しろというのですか？鎮痛剤は少なくとも発作から痛みを取り除いてくれますし、鎮静剤によって彼らを落ち着かせ、発作の後に眠

らせることができるのですから・・・」

臨床薬理学士の副代表ラバダン・アフメットハノヴィッチ・ラバダーノフが到着した。ラバダンは悲しげにシーナを見つめている。鎮静剤が静脈に打たれるとすぐに彼女の頬に涙が流れ始めた。すでに発作が起こってから47分が経っている。少女の視覚も聴覚も正常に機能してはいないが、彼女が呼吸を取り戻し始めたことは明らかだった。

「涙は発作が終わったという合図なんです」と母親は言う。

—こうした発作はどれくらいの頻度で起こるのですか？

「1日に3回か4回です。彼女が舌を飲みこまないようにするために、歯を折ってしまいそうになります」と母親は言う。

「本当に苦しいです。シーナもこうした発作で疲れ果てています・・・もしもこれが何の中毒であるのか明らかにしてくれれば・・・発表してくれないとしても、どうやって治療すればよいのかを私たちに教えてくれさえすれば・・・政府はいつまでこんなことを続けていくのでしょうか？」

病院の主任医師であるヴァーハ・ダルダエヴッチ・エセラーエフのオフィスを訪ねた。

「この病院の医師は当初からこうした被害者の治療に当たってきました」と彼は言う。「未知の原因による中毒という自分たちの診断を取り消す気はありません。いったい何がどうなれば、あれがヒステリーや集団精神病になるのでしょうか？」

「確信していますが、あれだけ多くの子どもたちがただ単にヒステリーを起こしただけで精神的な興奮状態に陥ることは決してありません。必ず何か原因があります。委員会が言っているようにこれが単なるヒステリー性の発作だとすれば治療も簡単だったでしょう」

—これからどうなるのでしょうか？

「わかりません。行き止まりです」

—どうやって治療しているのですか？

「対処療法です。発作があれば抗痙攣薬を投与します。痛みがあれば鎮痛剤を打ちます。ですが、発作は続いています。私たちは繰り返し何らかの治療計画が必要であると訴えています。けれども私たちが治療計画を行えるよう促し支えてくれる人は誰もいません。モスクワとグローズヌイの委員会はここを訪れて患者たちに『演技を止めろ』

と言ったのです。けれどもどうすれば彼らが演技などできるのでしょうか？患者と一緒にいたのは私たちだけだったというのに。彼らを襲ったのは、神経系を過敏にさせるある種の有毒物質です。ドアを開ける音や小包が鳴る音によって発作が引き起こされることもあります。今まで知られているどんな病気にもこんなものはありません」

地元の住人の大多数がそうであるように、被害者の家族も、汚染の原因はスタログラドフスクの学校の女子トイレであったと考えている。被害者の全員が一時はそこにいたからである。誰であれトイレに入った人が最も重症で、その付近にいただけの人には軽症であったということがはっきりしている。医師はそれが直接距離に反比例して影響力を減少させる有毒物質—最も可能性が高いのは固形の有毒物質だが毒ガスが散布された可能性もある—によるものであると主張している。シェルコフスクやシェルコザヴォドスクの学校の事情も同様である。

病人が学校という時間と空間によって明確に限定される範囲にいたことで、大規模な病気が発生した状況の詳細は明らかになっている。例えばシェルコザヴォドスクでは、校舎の一階にいた生徒だけが病気になっている。当日登校しなかった生徒は今も健康だ。

12月20日、シェルコフスク地区のすべての学校が休校になり、チェチェン共和国の検事総長が犯罪捜査を開始した。

そして12月21日、政府の報告書は突然「すべてマスコミのせいである」と発表した—テレビでその話題が取り上げられる回数に比例して発作が増え新たな患者が現れると言われた—。12月22日、チェチェン共和国の主任神経学医であり精神病医でもあるムサ・ダルサーエフが診断を下した—いわく中毒ではなく「心因性の原因による擬似的喘息症候群」あるいは「精神的な自己催眠」である—。ダルサーエフは親を集め、病気の子どもたちは演技をしており母親が彼らを甘やかしているとして責め立てた。彼は発作がただの「ショー」であり、観客がいなければ終わるものであると主張した。彼は被害者の母親たちを「映画配給業者」—金目当てに子どもの病気を長引かせようとしているクズ—と呼んだ（被害者の家族は現在に到るまで誰も物質的な支援を求めている）。これは特殊な例ではない。似たような中毒症状

は、2000年7月26日にグローズヌイ農場地区の住宅地スタリエ・アタギでも発生した。そこでは二度の弱い爆発音が響き、銀がかかった紫色のチューリップの形をした円柱状の煙が150メートル上空まで舞い上がった。それによって村の外れまで広がる雲が発生した。

疫学報告書の結論によると「爆発があった翌日、中毒症状一強烈で激しい発作、意識の喪失、激しい情緒不安定、自己抑制的な動き、抑制できない嘔吐、激しい頭痛、恐怖の感情、場合によっては吐血一を示す最初の患者が現れた」。

話は2006年に戻る。私たちの背後には、地雷を撤去し爆弾を除去するための短い休戦期を挟んだ11年の戦争がある。あまりにも多くの戦争犯罪が行われてきたために、司法はこうした蛮行を裁くことを恐れるようになっている。けれども、イデ

オロギーは以前と同じように残っている一不幸にもチェチェンで生きている人々は人体実験の材料であると見なされているのである。

当局は最も重態の患者を南ロシア最大の都市スタプロポリの医療学術専門病院に連れて行くことで彼らを隔離しようとしている。そこで起こっていることについては秘密が保たれるからだ。治療の間、どの薬が注射されているのかということや分析の結果がどうであったかということ伝えてもらえた患者は一人もいなかった。

シエルコフスク地区では、汚染された学校は閉鎖された。親たちは健康な我が子を再び学校に通わせることを拒否し、校内を無害化して被害者の診断名を公表することを要求した。当局は何も特別なことは起こっていないと主張している。

●「何がポルトコフスカヤを殺したか？」

チェチェンニュース 大富亮

チェチェンニュース Vol.06 No.21 2006.10.09

<http://chechennews.org/chn/0621.htm>

陰謀の結果、彼女は命を落とした。そういう言い方は嫌なのだが、資金と政治権力を背景に地下で作られた暗殺が、私くらいの人間に見通せたらそれは陰謀とはいえないけれど、陰謀は彼女の遺体がエレベーターを血の海にしているのが発見された時に、確かに地上に現れた。もう変えることのできない事実として。

●陰謀

ひどい事件から、三度目の夜が来た。

アンナ・ポルトコフスカヤ女史は、ロシアの新聞「ノーヴァヤ・ガゼータ」の評論員として、1999年の第二次チェチェン戦争の始まりのころから、チェチェンへの取材をはじめた。月に一度はチェチェンに行き、その土地の人々にかくまわれながら各地を転々として、記事を書きつづけた。それはNHK出版から刊行されている2冊の本、「チェチェン やめられない戦争」と「プーチニズム 報道されないロシアの現実」が朽ちることのない記録になって、日本語として読むことができるから、ぜひ多くの人に読んで欲しいと思う。

陰謀の結果、彼女は命を落とした。そういう言い方は嫌なのだが、資金と政治権力を背景に地下で作られた暗殺が、私くらいの人間に見通せたらそれは陰謀とはいえないけれど、陰謀は彼女の遺

体がエレベーターを血の海にしているのが発見された時に、確かに地上に現れた。もう変えることのできない事実として。

まさにポルトコフスカヤの死の直前に、ロシアの人権団体の連合サイト、「カフカスキー・ウーゼル（コーカサスの結び目）」が、ポルトコフスカヤにインタビューをしている。

(<http://eng.kavkaz.memo.ru/newstext/engnews/id/1072060.html>)

その2日前の10月5日は、チェチェン親ロシア政権のボス、ラムザン・カディオロフ首相の30歳の誕生日だった。

憲法によれば、チェチェン大統領の立候補資格は30歳以上であることだ。彼はチェチェンの大統領になる資格の一つを手にしたことになる。その憲法自体、眉唾ものの国民投票で決められたものだと言うことを別にすれば。

ポルトコフスカヤは、プーチンに対する批判者であると同時に、カディロフに対する強烈な批判者だった。その感覚はわかる。プーチンはチェチェン戦争によって大統領に上り詰め、チェチェンをぼろ雑巾のようにし、ロシアも、意味は違えど相当にひどい状況だからだ。そしてカディロフは私兵集団「カディロフツィ」を率いて、ロシア軍を後ろ盾にして、同じチェチェン人たちを誘拐しては拷問し、身代金を奪ってきた。

というわけで、ポルトコフスカヤには10月5日に生まれた男と、7日に生まれた男、その二人の敵がいた。彼女が射殺されたのは7日だが、どちらに殺されたのだろうか。あるいはまったく別なのだろうか。プーチン政権に彼女が殺されたと考えてしまいそうになるが、大統領の誕生日に殺されたと言う事実が、あまりにも刺激的なので、かえってそう指摘することをためらわせている。そうやって混乱させることも、たぶん折込済みなのだ。もっと大きな文脈で読み解くほかない。

●チェチェンの建設ラッシュ

おおまかに、上記サイトのポルトコフスカヤへの「最後のインタビュー」の内容をまとめよう。

ここ数ヶ月、チェチェンは建設ラッシュに入っていた。学校、道路、噴水、それからグロズヌイ北空港。空港は5日のカディロフの誕生日に、おごそかに開業した。社会的な建築物を次々と作ることで、すべてが個人の管理下にあることを宣言したのだ。ポルトコフスカヤはこの動きをこう批判している。

「彼の<個人の管理>というのは、他の人たちへの脅迫—武器によるものと、建設資金です。そうした金は、連邦予算から出ているわけではありません。どうやって資金を満たしているかというと、賄賂の差し押さえをしているんです。ロシアならどこでもそうですが、チェチェンの官僚も腐敗しています。彼らは正規の給料以外に、かなりの金額を<貢がれ>ているんです」その金から、今度はカディロフが上前をはねる。

それから、グデルメスで開催されたような「チェチェン初のロックコンサート」のようなものの切符を何倍もの値段で、何枚も買わせるというような資金集めが、末端では当然のようになっているのだという。

それくらいの金ではもちろん建設ラッシュを支えきれない。ポルトコフスカヤによると、カディ

ロフは連邦予算の獲得工作もしているが、財務省は難色を示して、まず計画書類や、コスト計算書を出すように要求してくる。そこは常識的だし、いかに国家予算が潤沢でも、プーチンはそうそうカディロフを甘やかしていないことが少しわかる。

彼女は現場を見てきているから、そのからくりがわかっている。「この建設ラッシュには、計画書のたぐいなんかありません。だから、カディロフはモスクワにしょっちゅう来て、そういう文書なしでプーチンに金を出させようとしていました。でもそれもうまくいかなかったんです」

ポルトコフスカヤがこういうことを言い、記事に書く。今朝の東京新聞によると、チェチェン市民に対する拷問についての写真や証言が、NV紙に掲載のところだったのだという。それにはもちろん、カディロフツィの暴力も取り上げられるはずだったのだろう。けれど、そのデータが入ったパソコンは、彼女の死のあとで警察に押収されてしまった。

建設で思い出したことがある。「チェチェンやめられない戦争」では、ロシア軍の大工兵部隊、国防省特別建設総局による建設汚職が、かなりのページを割いて説明されている。詳しくは本を読んでもらうしかないのだが、おもいきり縮めて言うと、この建設総局の架空発注と、この組織自体が行う監査のために、莫大な金がロシア軍の將軍たちのふところに収まっているという告発だ。

●情報の戦争

プーチンにとって、ポルトコフスカヤの存在は目の上のたんこぶだった。日本からチェチェンの情勢を見ていると、私たちはごくわずかな目を通してしか、チェチェンの情勢をみることができていないことに気がつく。世界が知っているその一つの視点＝ポルトコフスカヤを、おととい、私たちは失った。だから、一時的な世界からの批判はあっても、プーチン政権とその後継者たちにとって、これは悪いことではない。それなら、犯罪捜査は連邦保安局（FSB=新 KGB）、参謀本部情報総局（GRU）、その他治安当局の内部にまでさかのぼらなければならぬはずだ。政府内部に犯人がいるという可能性を抜きにして、この事件は解決できない。

カディロフにとっては、もっと切実だ。チェチェンにいることは、資金の調達と、自分に叛く可能

性のある部下や国民たちををなだめたり脅したりすることの連続で、それほど立場が磐石なわけではない。ましてポリトコフスカヤがうろうろすることで、「復興」の裏側や暴力沙汰が報道されれば、プーチンの財布の紐はさらに固くなる。だから、部下が殺したということには絶対にならない形で、ポリトコフスカヤに消えて欲しい。

そのためにモスクワでヒットマンを雇うのは、まったく造作のないことのように、事実プーチン政権になってから、100人にのぼるジャーナリストが殺害されたり、事件に巻き込まれたりしている。去年1年間でも、アメリカのフォーブス誌ロシア版の編集長フレブニコフを始め、12人が殺されている。NY紙だけでも、過去に2人の記者が殺害されている。

たとえば、ポリトコフスカヤを殺したのはチェチェン人ではないかと疑うこともできる。そうだと八方都合がよい。カディオロフの部下ではないにしても、少し頭のおかしいチェチェン人が、「復興の進むチェチェン」の正しい姿を伝えようとせず、足をひっぱるジャーナリストを殺す。世界中が「徹底捜査を」と叫ぶ中、いとも簡単にそのチェチェン人は捕まり、プーチン政権とカディオロフの両方からいいように罵られる。世界もその筋書きを、少し首をかしげながら、なすすべもなく飲み込んで、わすれる。

ちょうど同じことが、北オセチア・ベスラン学校占拠人質事件のとき、ヌルパシ・クラエフという青年の身に起こった。彼は占拠犯の内ただひとり生きて逮捕された人物だが、彼の家族は「ロシアの刑務所に入っていたはずなのに、なぜあそこにいたのか、わからない」と言っている。

●チェチェンへのまなざし

とてもよくあることとして書くと・・・チェチェンの若者が、ロシアのどこかの町で警官に呼び止められ、さしたる理由もなく留置所に入れられ、出られなくなる。何かの犯罪を犯したという自供を強要され、拷問をうける。大怪我させられたあとに待っているのは、取調室の上に広げられる、真っ白な紙だ。ここにお前のサインをしると、最後に強要される。その紙は何に使われるかわからない。

ポリトコフスカヤの事件に、こんなことが起こらないとは限らない。誰が殺したにしても、最終的な目標は達成できるからだ。私も含めて、人は

ときどきすごく単純な考え方を受け入れてしまうから、チェチェンのごく普通の人々のために書きつづけていたポリトコフスカヤが、そのチェチェン人の誰かに殺されただけで、それまでの仕事がいなくなってしまうように感じられてしまう。

いつか、書店で誰かが訳知り顔に、「でもこの人、チェチェン人に殺されちゃったんだよね」と語るようになってしまえば、戦争を肯定する人々、チェチェンを占領することによって利益を得る人の誰にとっても都合がいいのだ。「犯人」となった若者が自分に起こっていることを理解して証言を変えても、世界はそのころには関心など持っていない。

1996年のこと、停戦中のチェチェンに国際赤十字の医師と看護婦たちがやってきて、医療活動を展開していた。しかしある晩、6人のスタッフたちがウルスマルトンの宿舎で眠っていたところに、何人かの武器を持った男たちが押し入り、その人々を射殺した。一人だけ生き残った看護婦は、犯人が「チェチェン語を話していた」と取材に答えた。この事件の真実はいまもわからない。けれど、チェチェンから赤十字が撤退し、OSCEが撤退し、外国人のまったくいない危険な地帯に逆戻りするために必要な条件は、ほとんどこの一言でつくられたのではないかと思うほど、強烈な事件だった。

私たちがこのアンナ・ポリトコフスカヤ暗殺事件の衝撃を受け止めて、安易な判断に走らずにぐっと持ちこたえることができるか、今はそれが問われているのだと思う。逆に言えば、私たちのまなざしそれ自体が、世界の片隅にあるチェチェンの在りように、影響を与えているということではないだろうか。

今言えることはほとんど何もない。けれど、路地の奥で罪のない人に暴行を加えるチンピラたちを、怖くて何もできない私たちが、それでもじっと見つめていること、しかもすべて記憶しているのだと、どんなやりかたかわからないが、表現することが、チェチェンを助けることなのではないかと思う。その礎になるものを、ポリトコフスカヤは命がけで遺してくれた。これを不朽の本にするかしないかは、私たちの方に置かれた問題のような気がする。

●日本の新聞報道

昨日から、朝刊を買いあさっては読んでいた。全

部の新聞社が、モスクワの支局員名を添えて記事を書き、ポリトコフスカヤの記事が暗殺を招いたことを、せいっぱいの書き方で書いていた。危機感がにじみ出ている。特に朝日新聞の扱いが2日にかけて続き、彼女の本の一節まで引用していたのには、少し感動した。そういえば、朝日新聞も、87年の5月に「赤報隊」と名乗る犯人に阪神支局を襲撃され、散弾銃で1人が死亡している。事件は解決しないままに、すでに時効を迎えた。

「今のチェチェンは隔離されていて、記者たちが問題意識をもちにくい」と、ある記者の方から聞いたことがある。けれども、こうして同僚が暗殺されたとき、マスコミというシステムは正しく動きはじめたのではないだろうか。私は日本において、危険も感じずにこうしてものを書いている。

だから、モスクワにいる人たちに、危険を冒してチェチェン取材してくれとは言えないけれど、アンナ・ポリトコフスカヤ暗殺事件のことを、なんとか継続して、身の危険を感じるほどディープなものでなくとも、取り扱いつづけて欲しいと思う。それが、結局はチェチェンとロシアの今を伝えることになるからだし、私たちが何もできなかったこの事件のことを、安易な結論をつけずに思い出し、問題意識を更新する助けになると思うからだ。

「誰が」彼女を殺したかだけでなく、「何が」彼女を殺したか、ということの方が、個人的には気になっている。この暗殺事件は、何の挑発なのだろうか。

●チェチェン地図&年表

16世紀	帝政ロシアによるチェチェン侵略開始
19世紀	帝政ロシアがチェチェンを併合
1944年2月	スターリンによるチェチェン民族強制移住
1991年11月	ドゥダーエフ・チェチェン大統領がソ連邦からの独立を宣言
1991年12月	ソ連崩壊
1994年12月	ロシア、チェチェンへの軍事侵攻を開始 (第一次チェチェン戦争)
1996年4月	ドゥダーエフ大統領、ロシア軍の攻撃により死亡
1996年8月	停戦合意の成立(第一次チェチェン戦争終結)
1997年2月	民主的な選挙によってマスハドフ氏がチェチェン大統領に当選
1999年8月	チェチェン野戦司令官バサーエフらによるダゲスタン侵攻
1999年9月	モスクワアパート爆破事件、プーチン首相(当時)は「チェチェン人の仕業」と断定、チェチェンへの軍事侵攻を再開(第二次チェチェン戦争)(ただし元ロシア大統領候補だったアレクサンドル・レベジは爆破事件は政権側の仕業だと発言している。)
1999年12月	プーチン、ロシア大統領に就任
2002年11月	モスクワ劇場占拠事件(ロシア特殊部隊が突入時に撒いた神経ガスのため、人質120人以上が死亡)
2002年4月	アレクサンドル・レベジ、ヘリコプター墜落事故で死亡
2004年9月	北オセチア・ベスラン学校占拠事件
2005年3月	マスハドフ大統領、ロシア軍特殊部隊によって暗殺される
2006年6月	新大統領サドゥラーエフ、親ロシア派部隊によって殺害される
2006年7月	野戦司令官バサーエフ死亡



●アンナ・ポリトコフスカヤ暗殺事件に対する日本市民の声明

10月7日、私たちは衝撃的な悲しい知らせを受けました。知られざるチェチェン戦争の真実を追究し、ロシア社会の不正義と非民主主義的な動きに鋭いメスを入れ続けてきた優れたジャーナリストであるアンナ・ポリトコフスカヤさんが、この日何者かによって射殺されました。

彼女はこれまで決死の覚悟で、ロシア軍に踏みにじられるチェチェンの民衆の姿を伝えてきました。それがゆえに度重なる脅迫や妨害を受けてきましたが、彼女はひるむことなく事実を伝え続けてきました。ロシアにおいてはすでにプーチン政権下において100名にもものぼるジャーナリストが殺害されています。政府によるメディアに対する政治的・暴力的な規制も強化される中、彼女が属した「ノーヴァヤ・ガゼータ」紙は、ロシアでは限られた真実を報道するメディアの立場を貫いてきました。

これらのことから、今回の事件は明らかに彼女の正当な言論活動に対する政治的な暗殺事件であると私たちは考えます。この事件はロシア一国の問題ではなく、民主主義の基礎をなす自由な言論活動への重大な挑戦であり、世界的な問題です。

それゆえ彼女の死は、チェチェンの人々、ロシアの人々のみならず、世界の平和と民主主義を願うすべての人々にとっての大きな損失です。私たちは今言いようのない深い悲しみと大きな憤りの気持ちで一杯です。一体誰が彼女を死に追いやったのか？ なぜ彼女が殺されなければならなかったのか？ 残念ながら真相は闇に包まれています。

アンナ・ポリトコフスカヤさんの死を心から悼む日本の市民として、私たちは真実を求めます。戦争がなく、自由に物が言え、真実を報道できる世界を求めたいと思います。真の平和は、民主主義の実現した世界にしか達成されません。私たちは、彼女の遺志をついでチェチェンの平和と、世界の民主主義のために歩み続けることを誓います。

アンナ・ポリトコフスカヤさんのご冥福心よりお祈りします。安らかにお眠り下さい。

10・12緊急追悼集会「アンナ・ポリトコフスカヤの暗殺とロシア・チェチェン戦争」参加者一同